

北海道立幌西高等学校  
長

五十年一句集

北海道立幌西高等学校  
長  
昭和五十九年四月  
至昭和五十九年三月

ひ  
び  
き  
合  
ふ  
何  
か  
が  
充  
て  
る  
木  
の  
芽  
か  
な

対  
面  
式

芽木の窓明日ある出会いまたひとつ

一学期始業式

運動会

万縁の底青春の朝生まる

天へ  
一学期終業式  
反り青嶺を分かつ  
ジヤンプ台

二 学 期 始 業 式

少 女 像 双 手 に 青 红 抱 き を り

オ リ ケ ス ト ラ 胸 の 底 ま で 青 红  
管 弦 楽 团 定 期 演 奏 会

心ひとつにつなぐ西高祭  
西高天高し

見学旅行

平安の旅祈りをりななかもど  
旅終へし眼に新しきななかまど

避難訓練

雪晴や避難訓練整然と

二学期終業式

冬銀河生徒の眼負い明日の背

卒業の視野離れざる大雪嶺  
卒業式

校庭の樺元日となりにけり  
炎えに炎ゆ朝雪中の初サツカ

三学期始業式

57

1

3

10

18

別  
れ  
ま  
た  
ひ  
と  
つ  
ど  
こ  
か  
に  
雪  
解  
音

送  
別  
会

眼  
の  
奥  
に  
雪  
嶺  
据  
え  
て  
進  
級  
す

終  
業  
式

嶺は始  
入学の眼にて校業  
にゆるぎ解急ぎを  
にぎなき雪解  
にぎなき残雪  
にぎなき嶺

大いなる出会いの宴、春灯下  
歓迎会（協和会）

大いなる出会いの窓や風光る  
面式

明日 創る力 青櫻に 研なす  
運動会開会式

触れ合いの尊き真昼リラ芽立つ  
新入生歓迎会（生徒会）

運動会閉会式

青嶺立つ風青春の一日果つ

学ぶ窓明日の青嶺のり出せり  
一学期終業式

二 学 期 始 業 式

雲 扱 い を り 立 秋 の 蒼 穹 像

初 秋 の 母 校 を 創 る 力 か な  
学 校 祭 開 祭 式

心  
繼  
ぐ  
古  
稀  
の  
母  
校  
や  
天  
高  
し

七  
十  
周  
年  
記  
念  
式  
典

心  
合  
い  
力  
合  
い  
い  
ま  
母  
校  
秋

学  
校  
祭  
閑  
祭  
式

電  
飾  
の  
懲  
に  
面  
映  
ゆ  
年  
忘  
れ  
国  
語  
科  
忘  
年  
会  
(ほつ  
貝亭)

白  
樺  
に  
ふ  
る  
雪  
い  
つ  
も  
斜  
め  
な  
り  
終  
業  
式

翔  
つ  
前 始  
の 息  
鎮 業  
め 式  
を  
り  
初  
鴉

ふ  
れ  
合  
い  
の  
宴  
げ  
の  
あ  
か  
り  
雪  
照  
ら  
す  
忘  
年  
会

別  
れ  
ま  
た  
一  
つ  
ど  
こ  
か  
に  
雪  
解  
音

國  
語  
科  
送  
別  
会

風  
花  
や  
白  
樺  
に  
目  
の  
の  
こ  
り  
を  
り

卒  
業  
式

終業式

立春の権に触るるや通ふもの

別る  
と  
背な  
を  
離る  
る  
雪解  
音  
送別会

3  
24

3  
25

白樺をのぼる光や芽ぶき前

眼の底の雪嶺明日をひらきを  
入 学 式

ふ  
れ  
あ  
ひ  
の  
宴  
や  
ま  
ろ  
き  
春  
灯  
下

迎

会

ふ  
れ  
あ  
ひ  
の  
芽  
ひ  
び  
き  
あ  
い  
こ  
の  
眼  
鏡

対

面

式

4

17

4

9

友  
む  
か  
ふ  
宴  
の  
激  
り  
春  
灯  
国  
語  
科  
・  
桜  
井  
先  
生  
歓  
迎  
会

大青嶺運動會開會式  
搖るがす若き沸りかな

運動会閉会式

万縁の底の底ひに光るもの

宿泊研修団出発  
青嶺踏み青嶺のこころさぐる旅

宿泊研修団帰着

青嶺踏み青嶺を得たり真澄空

白球のつなぐ陸みや青嶺  
野球東西戦

青嶺陸みつなげり大飛珠

陽  
関  
を  
踏  
み  
し  
確  
信  
胸  
炎  
ゆ  
る

式

始  
業

踏

み

し

確

信

胸

炎

ゆ

る

ひ  
き  
よ  
せ  
て  
青  
嶺  
の  
答  
え  
求  
め  
け  
り

終

業

式

嶺

の

答

え

求

め

け

り

若き意氣  
けらりきらりと充つる秋

学校祭開祭式

秋闇ひらき若き炎のたぎりかな  
聖火祭

マ  
ラ  
ソ  
ン  
の  
眼  
の  
窓  
と  
な  
る  
滝  
の  
峰

10  
17

ス  
タ  
ー  
ト  
の  
眼  
に  
触  
れ  
り  
秋  
の  
嶺

10  
8

マ  
ラ  
ソ  
ン  
大  
会

旅  
了  
え  
し  
眼  
の  
奥  
に  
澄  
む  
秋  
灯

明  
日  
創  
る  
旅  
行  
團  
出  
發  
見  
送  
り  
な  
な  
か  
ま  
ど

国語・教務合同亡年会

熱砂漠経し身を沈む温泉かな  
しみじみと旅もどりくる雪の窓  
留守まもり残りし友のあつき胸

「平野謙三先生を激励する会」に当つて

支えられ六十路が越えて雪の径  
雪嶺の胸に六十路の胸合はす  
六十路にてやうやく見え来雪の道

卒業の天ひろげをり芽白樺  
贈卒業生（卒業記念品に）

「それでは、一句」平野校長先生の力強い声が響くと一齊に歎声と拍手が沸きおこる。ある日、先生はこうおつしやつた。「集会だけが、校長と生徒との本氣で触れ合う場だ。どうすればそれができるか」と考えた時、自分の俳句作りが胸に浮かんだ」と。人の心を打つには多言を要しない。短い言葉が相手の人生を変えることもある。俳句はわずか十七音であり、もつとも日本人向きの表現法である。これを選ばれた先生に心から敬服する。そして先生のあたたかな祈りのこもつたその時々の一句が、どれほど生徒たちの心をあたため、また潤いを持たせたことか。

晶させたのである。「人生は出会いであり心の響き合いである」二年前御着任の時の第一声がこれであつた。それを身をもつて「それでは、一句」に結ぶ。今年度二学期の終業式の時に、一句の前に師・加藤秋邨の言葉一大器でいらつしやる先生は、「の方に俳句を学びたい、ただその真実感合」についてお話しになつた。北海道における秋邨門下の先生の師・加藤秋邨は、結社に属すると変な仲間意識が出てきやすいものだが、先生は一心で「寒雷」の内にいて精進してきたとおつしやつたことがある。純粹一途に秋邨先生を畏敬してこられたというのである。秋邨はその基盤に松尾芭蕉への畏敬の念がある。三省堂の芭翁入・たる。自然滲透」の言葉をくりかえし使いつた風のものである。秋邨はその芭翁の變化の様子を凝視し思索し鑑賞するといふた。

を見、貫く一なるものを見据えて、それを句作りの根本的態度にされているように見える。子規が蕪村に学んだのに對し、再び原点に脚を置いたのであつた。

学校長平野謹三先生は、その歎歌の「眞実感合」の立場についていささかのはにかみを見せながら集会で語られたのである。「俳句の中に人間の生きることを第一に重んずる。生活の眞実を基盤とした俳句。自然の眞実と滲透した自己の眞実相を把握すること」（国文学・解釈と鑑賞）

これが「寒雷」の立場であつた。しかし、それを一句一句、「日記を書くつもりで毎日休まずに」とおつしやるよう精進なさつていふことは大変なことなのである。「芸術をつきつめてゆくようなくなく、分りやすい句で生徒に触れてゆきたい」とも、先生はおつしやつた。しかし、その一句一句に詩人としての、汚れのない情熱の燃焼を感じない生徒はいなかつたはずである。芭蕉も挨拶の句を旅の行く先きごとに示している。それは相手を充分に理解しその内へつましく入つてゆく行為であつて、実際にむずかしいものなのである。平野校長先生がそれをなさつてきたいことに心から敬意を表したい。

この三月で先生は御退職である。それはすなわち本格的な俳句人生の出発である、といふ御心境らしい。芭蕉がもつとも大切にした若初心（赤子の心）にかえつておられる。生徒も教師も、先生のこゝを範としなくてはいけない、そうおもう。